

はなみずき

(病院だより)

2013年9月1日
発行
山梨大学
医学部附属病院

副院長あいさつ

副院長(安全管理担当) 藤井 秀樹



平成25年度から武田正之(前安全管理室長(現医学部長))のあとを引き継ぎ、医療安全を担当させていただくことになりました。すでに確立されている医療はもちろんのこと、大学病院であるが故に行われる先進的な医療においても、安全が確実に

担保されることが、患者さんそして職員にとって最も重要なことであると認識しております。概念的ではありますが、私が考えます医療安全確保のための三原則は、①いかなる場合も安全を最優先に考える。②ルールを守る。③危険源をみつけない。というものです。この三原則をもとにこれまで院内の医療安全確保のための様々な対策が講じられてきたと理解しておりますし、これからもこの原則をもとに皆さんのご協力をいただきながら活動してい

きたいと思っております。

ところで、本院も本年10月で開院30周年を迎えます。30周年記念式典が島田眞路病院長のもと、来る10月25日に開催されることになっております。これを機会に本院の歩んできた歴史を全員で顧みることが、これからの本院をどのように舵取りしていくかを考えるのにきわめて意義の大きいことだと考えています。

私は開院と同時に当時の山梨医科大学医学部附属病院第一外科に赴任してまいりました。赴任当時の医療安全の概念は本院だけではなく全国的に、現在と比較すると信じられないほどレベルの低いものでした。この30年の間、様々な試行錯誤の末に現在に至っていますが、これから本院が目指す医療安全確保のための活動は、再びこれからの30年を見据えたものにしなければならないと思っています。ご協力をよろしくお願いいたします。

「私がか大切にしたい看護」看護部長就任あいさつ

看護部長 岩下 直美



今年度は開院30周年を迎える節目の年です。このような時に看護部長を拝命し、昭和58年の開院準備期から今日に至る道のりを振り返る機会でもありました。

本院の看護部が大切にしてきた看護を考えると、そこにはいつもウィーデンバックの「看護の基本となるもの」がありました。その核となる言葉が「ニードフォーヘルプ=援助を求めるニード」です。私はこれを満たす看護を「心が通う看護」と考えています。心を通わせるためには、自分自身が自律していなければならないと思います。また、看護師個々が自律する目的もここにあると思います。看護の方向性に迷ったり、見失いかけた時に、今自分のやろうとしていることは心

が通っているだろうかと思ったり立ち止まり考えた時に、方向性が見えてくるのではないかと思います。

社会情勢が目まぐるしく変化する中、国立大学看護部長会議では、「10年から20年後の国立大学病院看護部の未来と役割～今後のあるべき姿を求めて～」をメインテーマに国立大学病院の使命を、看護実践、教育、研究、運営、地域・社会貢献及び国際化に絞り、検討が行われています。どのような状況の変化があっても、自分たちが目指す看護を実践するために、どう行動すればよいか看護部の皆さんと共に考えていきたいと思っています。そのためには、病院全体との協力が欠かせません。病院全体がひとつのチームとして機能した時に、本当に「心が通う医療そして看護」が実践できると確信しています。皆様のご指導、ご支援を賜りますようお願い申し上げます。

栄養管理部長就任あいさつ

栄養管理部長 小林 貴子



4月1日より、栄養管理部長に就任しました小林貴子です。長期にわたり栄養管理部長を兼任され、栄養管理部を導いていただいた島田眞路病院長には、心から感謝いたします。「安全で信頼される給食」を目指し、

病院長はじめ皆様のご指導をいただきながら、微力ではありますが、精一杯務めさせていただきますので、よろしくお願いいたします。

私は、大学卒業後、母校の研究室、そして民間病院勤務を経て、平成7年11月から本院に勤務しています。本院勤務のきっかけは、平成6年の厨房見学の検食です。大量調理にもかかわらず、多種類の病態別に管理された、大学病院食とは思えない繊細さと美味しさに大いに感動し、私もこのような「食事づくり」に参加したいと思いました。縁ありまして本院で働くこととなり、現

在もその時の気持ちを変わずに持ち続けています。

また、私は次の五つのことを心がけています。それは、①食べることは生きることである。②栄養学は人間製造学、人間の体を形成しているものは食物であり食事である。③食事療法は医療の一環である。④家族に食べさせたい食事を提供する。⑤入院から在宅への治療を繋げる食事療法です。今後は、入院外来患者さんへの栄養教育を継続しつつ、「入院患者さんへの栄養管理業務」を確固たるものにしていき、さらには患者さんの早期回復・退院を後押しするためにも、皆様のご理解を得て「病棟専属管理栄養士の配置」を実現していきたいと考えています。

このほか、地域連携・学内融合にも意識を深め、取り組んでいきたいと考えていますので、忌憚のないご意見をいただきたいと思います。今後とも皆様のご支援をよろしくお願いいたします。

ISO15189 の認定を取得しました

検査部 臨床検査技師長 小池 亨

本院検査部は、6月27日、国際標準化機構(International Organization for Standardization)が制定した「ISO15189」(臨床検査室における品質と能力に関する国際規格)を取得することができました。この認定取得に当たり、ご理解・ご支援をいただきました島田眞路病院長及び事務部門の方々に心より御礼申し上げます。

街で“〇〇工場:ISO9001認証取得”の看板を目にした方もおられると思います。ISO9001とは、どの業種にも通用する品質管理及び品質保証に関する国際規格で、この仕組みを臨床検査室に特化したものが「ISO15189」であり、ISOとは、国際標準化機構の通称で、世界規格を統一するための機関です。

検査部では、平成24年3月より、ISO15189の認定取得を目標に、ワーキンググループを立ち上げ、職員一丸となって1年余り取り組んできました。具体的には、組織の明確化、個人や部門の権限と役割分担の明確化、標準作業手順書をはじめとした文書類の整備、文書記録保持の確立、的確な情報伝達の周知徹底方法の構築について検討を重ねてきました。

認定取得後の期待される効果としては、①検査

業務を標準化することにより作業の効率化、ミスの軽減が期待できる。②Plan,Do,Check,ActionのPDCAサイクルを的確に運用することで、継続的な業務改善・検査の質の向上を図ることが可能となる。③各検査を明確な根拠に基づいて実施することで信頼性の高い検査情報を提供できる。④教育プログラムを整備することで人材育成に寄与できる。などが挙げられます。さらに、治験の臨床検査結果や海外投稿論文に使用する検査値が国際的に通用することは重要な特色と言えます。

この認定は、山梨県で初、国立大学病院で14番目、日本全国で73番目(現在66施設が継続中)の取得であり、今後も国際的にも通用するISO15189認定検査室として、更なる検査の質の向上をめざし、信頼される迅速かつ的確な検査情報の提供に努めてまいります。



認定証



4月1日より、杉田完爾前委員長の後任として、感染対策委員会委員長を担当させていただくこととなりました。また、本年度より感染制御室には、矢崎正浩感染看護師長に加えて、新たに専任医師として井上修准教授が就任し、充実した体制として出発できることとなり責任の重さを感じております。

本院の感染対策管理体制は、感染対策の決定機関である感染対策委員会、感染対策の企画、評価、感染症発生の把握並びに分析を行い、感染対策委員会へ提案と報告を行う感染制御室、そして感染対策の周知と実施の実働部隊である感染対策チームから構成され、感染予防、感染症患者発生時の対応、針刺し及び汚染事故発生時の対応、抗菌薬・消毒薬の使用、疾患別感染対策及び部署別感染対策をマニュアルに従って行っております。本年度の目標として、耐性菌と感染症のアウトブレイクを0件、手指衛生遵守率65%以上、蓄尿率15%以下を具体的目標に掲げておりますので、ご協力を賜りますようお願いいたします。

また、感染対策としては、院内のみならず県内の他病院との連携も行っております。平成24年度より感染防止対策加算の要件が変更となり、これに対応するため、本院は、市立甲府病院、社会保険鯉沢病院、国立病院機構甲府病院と連携し、年4回の感染対策防止に関するカンファレンスを行っております。また、県立中央病院とも年1回の相互評価を通じて、お互いに感染予防に努めております。本年より感染防止対策地域連携加算チェック項目表にもとづいて評価を行っており、地域全体の感染対策の向上にも努めてまいりたいと思っております。

さらに、Global化が進んだ今日では、院内感染といえども、広く世界へと目を向けていなければなりません。常に海外渡航者等から病原体が持ち込まれる危険性を念頭に、厚生労働省の感染症情報、国立感染症研究所(NIID)、アメリカ疾病管理予防センター(Centers for Disease Control and Prevention: CDC)、そして世界保健機関(WHO)等からの情報にも目を光らせております。今年、新型鳥インフルエンザ(H7N9)と新型ウイルスMERSの発

生が大きな問題となっております。これらについて簡単にご紹介いたします。

H7N9は本年2月に上海市で初めてヒトへの感染が確認された鳥インフルエンザAです。鳥に対しては低病原性ですが、ヒトの場合は下気道感染による重症肺炎の症例が多く発生しています。6月末までに中国、台湾で計131名の患者が確認され37名が死亡しています。患者数は減っていますが7月20日に1例の新規感染例が報告されるなど、終息したわけではありません。今秋以降再び患者が増加する可能性があります。迅速に対応できるよう監視を続けております。

MERSは平成24年9月以降中東で感染が広がっている新型コロナウイルス(MERS-CoV)による呼吸器感染症です。重症肺炎の他に、消化器症状や急性腎障害の合併等も見られ、7月21日までに報告された患者90名のうち45名が死亡しています。ヒト-ヒト感染が確認されており、平成15年に発生したSARSのように急速に感染が拡大する事態が危惧されています。

このような新型の感染症については、これまで日本国内での報告はありませんが、旅行者や企業駐在員が帰国後に発症し本院を受診される事態も想定されます。そこで、この両疾患について本院では職員に対し、当該地域への渡航の際には前もっての申請と帰国後の報告を義務付けておりますので遵守くださいますようお願いいたします。さらに、今春、新型インフルエンザ等対策特別法が施行されました。これには、体制整備として県による指定公共機関を設置し、まん延時の対策を実施することを求めています。本院もこれに指定される予定であり、それに伴い、本年度中にまん延時の診療継続計画を提出しなければなりません。多くの皆様方のご意見を参考にして策定してまいりたいと考えております。何卒、よろしくお願い申し上げます。

また感染制御室では、適宜、感染症ニュースとして皆様に情報を提供してまいりますので、ご意見やご要望がございましたらご連絡いただければ幸いです。

スタッフ一同、全力で感染撲滅にむけて取り組んでまいりますので、これまで同様、職員の皆様のご協力をよろしくお願い申し上げます。

病院再整備事業に関するお知らせ

病院経営企画室 再整備企画グループリーダー 佐藤 康樹

病院の再整備事業につきましては、平素より多大なるご協力を賜り、まずは一言、この紙面をお借りしまして皆様に御礼申し上げます。

病院の再整備は既存の病棟等、既設建物の改修完了までは長期間に亘る計画ですが、その最初の事業として新病棟を建設いたします。

この新病棟建設工事につきましては、去る5月23日に工事中の安全と建物が完成した後も安全な病院であるよう祈念する起工式を執り行い、6月初旬より本格的な工事に着手いたしました。

現在は、新病棟の基盤をなす免震構造体設置のための基礎工事を実施しております。地中にコンクリートの壁を作り、そこを掘り下げ、免震構造体を設置して、その上に建物本体を積み上げます。この病院の土台を作る作業は、今年の12月までの年内を要する見通しですので、建物自体が地上に見えてくるのは年明けの平成26年に入ってからになる予定です。

また、皆様にこのような作業工程や工事中的お知らせを、より分かりやすくお伝えできるように、病院再整備事業専用ホームページの作成を現在進めております。ホームページ開設後は、これを通して皆様に最新の情報を提供してまいります。

長い再整備期間中には、皆様にご協力をお願いする事項が多々あるかと存じますが、本院の理念でもある、患者さんも職員も「一人ひとりが満足できる病院」作りと、起工式の際に病院長が述べられた「日本一の病院」を目指してまいりますので、今後とも皆様のご協力をよろしく申し上げます。



新病棟起工式当日の建設予定地

院内のクリニカルパスを増やそう！

クリニカルパス推進委員会委員長 東田 耕輔

アウトカムという言葉が病院内外でもよく耳にします。医療もアウトカムが問われる時代になってきました。クリニカルパスで使用されるようになった用語です。パスは本来、工程表であり、工場であれば、①高品質の製品が多く作られる。②製品の品質改善が達成された。等がアウトカムになります。

医療でいえば医師或いは医療チームが、事前に患者さんに“うまくいくとこうなりますよ”とIC（インフォームド・コンセント）等で結んだ契約が予定通り達成されることで、アウトカムは診療行為により異なります。例を挙げますと、(例1)腎生検検査のアウトカム:検体が病理診断に十分な量採取されて、血腫増大・感染・他臓器穿刺などの合併症なく、予定通り退院できた。(例2)腫瘍摘出術のアウトカム:腫瘍が摘出されて、必要な化学療法が実施され、機能も回復して、合併症はコントロールされ、予定通り退院できた。となります。

もし日程がずれ、遅れて達成した場合は、バリエーションが発生したということになります。アウトカムを患者さんに示すというのは、ICと

同意義で、当たり前で至極当然だと、院内の大多数の方が思われていると思います。では、そのアウトカムが、医療従事者の全てに示されているか？ Yesではないでしょう。ICでは、各従事者が、具体的にどうすればいいかは記載されていません。クリニカルパスを作成することは、各々の役割を医療チーム全員に示すこととなります。各人の役割を個々にはっきりさせ、より具体的な目標を提供するという意味があり、チーム医療と言う点からは非常に大きな意味を持っています。

クリニカルパス推進委員会では、各診療科或いは各病棟でのクリニカルパス作成をお手伝いしています。皆様からのご連絡をお待ちしております。

連絡先:医療情報室(内線2086)

アウトカム:治療等の各プロセスの中で患者が達成すべき指標
バリエーション:クリニカルパスで予想されたプロセスと異なる経過や結果

緩和ケア研修会について

医療チームセンター長 飯嶋 哲也

去る6月8日、9日の2日間にわたり、看護学科教育研究棟を会場に平成25年第2回山梨県緩和ケア研修会を開催いたしました。この研修会は日本緩和医療学会の「医師に対する緩和ケア教育プログラム」に準拠し、緩和ケアの基礎知識普及を目的とした研修会です。この研修会を年1回開催することが、がん診療連携拠点病院の認定要件になっています。また、がん性疼痛緩和指導管理料などの診療報酬算定には本研修会を修了していることが要件とされています。この研修会は、合計12時間を超えるプログラム中に、講義だけでなくロールプレイ2回、グループワーク発表2回が含まれている参加型研修会であることが最も大きな特色です。

今回の参加者数は22名であり、参加医師15名のうち本院医師は12名（うち初期研修医5名）、本院以外の県内医療施設の医師は3名でした。本院産婦人科から4名も参加して下さったことが今年の大きな特徴のひとつでし

た。本来は医師向けのこの研修会ですが、本院の看護師5名、薬剤師2名にも参加していただき、より実践に即したグループワークを行うことができました。

この研修を受けた医師の総数は全国で4万人を超えています。山梨県内ではこれまでに350名を超える医師が本研修を修了しております。「がんと診断されたときからの緩和ケア」そして、「がんでなくても緩和ケア」が大きな流れとなってきているのが現状です。今後もこの研修会の役割はますます重要性を増してくるものと考えられます。



2日目のロールプレイ風景

平成25年度トリアージ訓練報告

防災対策委員会委員長 松田 兼一

5月25日に実施したトリアージ訓練についてご報告申し上げます。今回の訓練では「山梨県全体がひとつのチーム」をテーマとしました。大地震の際、交通事情で勤務地に赴くことが不可能となった場合には、出勤可能な近隣の病院で医療スタッフとして活躍していただく必要があると考えたからです。今回の訓練では県内の8病院から24名の医療関係者の皆様にご参加いただき、本院での診療に実際に携わっていただきました。さらには近県から援助に来てくれたDMATとの連携を想定した訓練も行いました。また、例年通り、山梨県医務課、中央市健康推進課、中北保健所の職員の方々、赤十字ボランティアの方々も参加くださり、訓練参加者555名、見学者約60余名と、総勢620名近くの方々に参加していただきました。山梨県全体がひとつのチームであることを実感していただけたかと存じます。

また、各ゾーンの傷病者数や転院患者、入院患者、帰宅患者の動向をリアルタイムに把握することが可能となるITトリアージに再挑戦いたしました。今回は病院内に備わっているコンピュータにソフトウェアをインストールするこ

とで、特別な資機材を必要とせずにITトリアージが可能か否か検証いたしました。結果は予想を遙かに上回る成果となりました。これにより、大災害が発生し、患者さんが一度に大勢本院を受診されても、混乱を最小限に抑えることが可能となりましたので、どうかご安心ください。

山梨県の災害医療を充実させるにあたり、行政機関と中核病院との連携強化が重要な課題となります。一歩ずつですが連携強化が実現されていると感じました。最後になりましたが、ご参加いただいた皆様、見学にいらして下さった皆様、本当にありがとうございました。そして、お疲れ様でした。



トリアージゾーンで活動するDMATメンバー



トリアージタグの情報を端末に入力する様子

「一日看護師」について

副看護部長 佐藤 あけみ

看護普及事業の一環として、看護に関心のある高等学校生徒を対象に、6月12日に一日看護師が実施されました。本院では山梨県立甲府昭和高等学校の生徒計26名（うち男性6名）が白衣に着替え、各病棟にて看護師と一緒に看護を体験しました。

終了後の座談会では参加した学生さんから「看護師さんの患者さんに対する気配りが素晴らしかった。」「大変な仕事ですが、とてもやりがいのある仕事だと思い、看護師になりたい気持ちが強くなった。」等の意見が出されました。病棟からも「学生さん達の看護師になりたいという思いが伝わり、初心に帰る事が出来た。」「あらためて、看護師の素晴らしさを認識出来た。」等の評価が得られました。

今年度は一日看護師に加え、夏休みを利用

した職場体験も実施し、県内から8校の中学校、5校の高校、2名の一般の方を受け入れました。

今後もこれらの事業を積極的に実施することにより、看護についての理解と関心を深めていただき、将来看護職を志す動機づけになる事を願っています。



座談会で挨拶する岩下副看護部長（当時）

山梨県立甲府昭和高校 2年 塩沢 倫留^{みちる}

いつもは入ることができない手術室に入ることができてとても貴重な体験ができました。手術をする患者さんは、麻酔などをしている、話すことができないので、手でさわることによって、患者さんの状態を知る看護師さんがすごいと思いました。また、手術する器具の名前を覚えたり、痛くないように注射をしたり、細かい気配りだけでなく、記憶力や技術も重要なんだと、改めて感じる事ができました。手術室に入る時にする特別な手洗いや、

手術の器具にさわらせてもらうなどして、普段なら知ることのできない病院の裏側が見れて、とてもいい勉強になりました。看護師さんでもいくつか種類があることもわかり、色々な人とたくさん接することができてよかったです。

今日、色々体験したことは、自分の将来を決める時の幅を広げてくれるいい機会でした。この経験を生かして、これからの進路をしっかりと考えていきたいです。

山梨県立甲府昭和高校 2年 志村 奏美^{かなみ}

一日看護師体験をする前でも、看護師になりたいと思っていた私にとってこの体験は、自分にとって得るものばかりでした。看護師さんの話だけでなく、実際に病室に入って患者さんとお話したり、治療を見たり、普段の生活では絶対に体験できないことをすることができました。また、看護師の仕事の意味や大切なこともわかりました。看護師の仕事はただ入院している患者さんなどの治療のサポートをするだけではなくて、病院の怖さや病気への不安を少しでもやわらげることができるようやすらぎを与えることなのかなと思いました。私自身入院したことはありません

んが、きっと小さい子や心に不安を抱えている人の大きな心の支えとなるのが看護師なのだ大きく感じました。どんなに患者さんに嫌なことをいわれても、どんなわがままにも、いつも笑顔で優しくいられることはなかなかできないことであると思うので、それがさっäできる看護師のみなさんの優しさや思いやりに心をうたれました。

今回のこの体験で以前よりもいっそう看護師という仕事への興味・関心が深まり、なりたいたいという気持ちが強くなりました。私の進路に大きな影響となったので生かしていきたいです。

富士山8合目救護所ボランティアに参加して

歯科口腔外科 矢崎 芳人

昨年に続き2回目の富士山8合目救護所ボランティア(第5班7月25日~27日)に参加させていただきました。

8合目救護所は、標高3,100mの太子館に併設されており、登山者の増加に伴い高山病、体調不良を訴える方が多くなったことにより、平成13年に当時の山梨医科大学が試験的に一時的な応急処置を行う場所として開設しました。翌平成14年に富士吉田市から山梨医科大学への正式な開設依頼を受け、今年で開設12年となります。現在、協力病院・施設の数も30以上にのぼっています。救護所では内科、外科等の応急措置が行われ、診療費はかかりません。

今年は、山開き前に世界文化遺産に登録されて世界中の注目を浴び、近年の富士山登山ブームと重なり、空前的な数の登山者が訪れている特別のシーズンです。それに伴って多くの患者さんが来所されています。

私は歯科技工士なので、去年は救護所でどんなお手伝いができるかとても不安でしたが、実際はお手伝いできることは多くあり、去年一緒した方からのお声掛けもあって参加させていただきました。今回はパトロールからの要請で9合目の宿泊所に赴き、医師に電話越しに意識

のない患者さんの状態を伝え指示を仰いだり、骨折の疑いのある患者さんをクローラーで搬送するお手伝いや第66回富士登山競走の給水所のお手伝いなど、多くの貴重な経験ができて大変勉強になりました。また、今年も神秘的なご来光を拝むこともでき、充実した時間を送ることができました。

今回ご同行いただいた横浜薬科大学教授・橋本先生ご夫妻(元本学薬理学教授)、ICU大久保さん、富士吉田市立病院中村さん、太子館の皆さまには、ご指導とともに、大変お世話になりましたことを感謝いたします。来年以降もぜひ参加したいと思います。



第5班メンバーと第6班メンバー。前列左から2番目が矢崎歯科技工士。

七夕コンサート

ヴァンフォーレ甲府 ヴァンくん

こんばんは! ヴァンくんです!

七夕やクリスマスや夏祭りなど、山梨大学医学部附属病院のイベントには、いつも呼んでいただいて、とても嬉しいです!

この前は、七夕コンサートにお邪魔しました! ハンドベル、アカペラ、オーケストラなど、いろいろな方がいて、とっても楽しい時間になりました。きっと、毎日いっぱい練習をしているんだらうなあ。本当はゆっくり音楽を楽しもうと思っていたのですが、ついつい、音楽に乗せられて、前に出て踊ってしまいました。オーケストラの演奏では、勝手に指揮をとってしまい、ごめんなさい。みなさん、僕に、とっても優しく接してくれました。ありがとうございます!

山梨大学医学部附属病院のイベント、大好きなので、これからもよろしくお願ひします。

今度、フォーレちゃんも誘ってみようかな。



医学部交響楽団の演奏で指揮をとるヴァンくん



4西ハンドベル部



パルフェの皆さん



医学部アカペラ部

夏祭りに参加して

小児科ボランティアサークル サニースマイル

私たち「サニースマイル」は本院の小児科病棟で活動している学生ボランティアサークルです。面会時間が終わる19時から就寝時間の21時まで、絵本を読んだりおもちゃで遊んだり子どもたちと一緒に楽しい時間を過ごしています。平成19年度からは毎年夏祭りのお手伝いをさせていただいています。

今年の夏祭りは7月31日に行われ、私たちサニースマイルも参加し、射的やヨーヨーすくい、スーパーボールすくいなどの催しを手伝わせていただきました。今年は例年以上に患者さんや家族の方などが大勢来てくださり、とても盛り上がった夏祭りになりました。中には何回も来てくれる子どももいて、私たち部員も楽しむことができました。最後に子どもたちが帰る時に、笑顔で「楽しかった!」と言っ

てもらえたことがとても嬉しかったです。これを励みに今後も活動を頑張っていきたいと思います。



輪投げやボール入れの様子

夏祭り後の納涼花火大会では、迫力のある花火に大きな歓声が上がりました。



左から小林総務課長、島田病院長、岩下看護部長、山田病院経営企画室長

「看護功労者」表彰及び「県民の看護師さん」表彰を受けました

5月10日に山梨県看護大会が山梨県及び山梨県看護協会主催により行われ、高野和美看護師長及び小林ひとみ看護師長が「看護功労者」として、矢崎正浩看護師長が「県民の看護師さん」として表彰を受けました。



左から高野看護師長、矢崎看護師長、小林看護師長

「看護功労者」の表彰は、県内で20年以上にわたり看護職に従事し、特に功績の優れた方々を表彰するものであり、平成25年度は18名が表彰を受けました。「県民の看護師さん」の表彰は、病気や障害を持つ患者さんに対し、親身になって看護にあたりるとともに、地域の保健医療の向上に尽くす看護師さんを表彰するものであり、県内から6名が表彰されました。

高野和美看護師長（3階東病棟）

患者さんや家族が笑顔になれること、一緒に働いているスタッフが生き生きと仕事ができるように応援することをモットーに働いてきました。周りの人に支えられたことが今回の受賞になったと考えます。これからも笑顔で頑張ります。

小林ひとみ看護師長（手術部）

このたび、看護功労賞を頂き驚いたり恥ずかしかったりで落ち着かない気持ちでしたが、今は感謝の気持ちでいっぱいです。開院当初より多くの方にご指導いただき今に至ります。一人ひとりが思い出され胸が熱くなります。本当にありがとうございました。

矢崎正浩看護師長（感染対策）

今回の受賞は、諸先輩方のご指導あつての賜物だと感謝しております。今後も、感染管理看護師として、院内全ての患者さんや職員を感染から守ることを目標に掲げ、日々の業務に励みたいと思います。

お知らせ

6月7日、山梨医科大学名誉教授（元山梨医科大学長）鈴木宏先生がご逝去されました。故人は、昭和55年に山梨医科大学に内科学教授として赴任後、副学長（病院長）、学長を歴任され、本院の発展に多大な貢献をされました。

ここに、謹んでご冥福をお祈り申し上げます。